

司式:佃 雅之
奏楽:中井喜久子

前奏:「キリストよ憐れみたまえ」(F.クープラン)

招詞:もはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからである。(ガラ3:28)

讃美歌:2「聖なるみ神は」

交読詩編 8:1-10

- 01 【指揮者によって。ギテイトに/合わせて。賛歌。ダビデの詩。】
- 02 主よ、わたしたちの主よ/あなたの御名は、いかに力強く/全地に満ちていることでしょう。天に輝くあなたの威光をたたえます
- 03 幼子、乳飲み子の口によって。あなたは刃向かう者に向かって砦を築き/報復する敵を絶ち滅ぼされます。
- 04 あなたの天を、あなたの指の業を/わたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの。
- 05 そのあなたが御心に留めてくださるとは/人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう/あなたが顧みてくださるとは。
- 06 神に僅かに劣るものとして人を造り/なお、栄光と威光を冠としていただくせ
- 07 御手によって造られたものをすべて治めるように/その足もとに置かれました。
- 08 羊も牛も、野の獣も
- 09 空の鳥、海の魚、海路を渡るものも。
- 10 主よ、わたしたちの主よ/あなたの御名は、いかに力強く/全地に満ちていることでしょう。

朗読聖書①エレミヤ書 7:1-7

◆神殿での預言

- 01 主からエレミヤに臨んだ言葉。
- 02 主の神殿の門に立ち、この言葉をもって呼びかけよ。そして、言え。「主を礼拝するために、神殿の門に入って行くユダの人々よ、皆、主の言葉を聞け。
- 03 イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。お前たちの道と行いを正せ。そうすれば、わたしはお前たちをこの所に住まわせる。
- 04 主の神殿、主の神殿、主の神殿という、むなしい言葉に依り頼んではならない。
- 05-06 この所で、お前たちの道と行いを正し、お互いの間に正義を行い、寄留の外国人、孤児、寡婦を虐げず、無実の人の血を流さず、異教の神々に従うことなく、自ら災いを招いてはならない。
- 07 そうすれば、わたしはお前たちを先祖に与えたこの地、この所に、とこしえからとこしえまで住まわせる。

朗読聖書②マタイによる福音書 21:12-17

◆神殿から商人を追い出す

- 12 それから、イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いをしていた人々を皆追い出し、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けを倒された。
- 13 そして言われた。「こう書いてある。『わたしの家は、祈りの家と呼ばれるべきである。』/ところが、あなたたちは/それを強盗の巣にしている。」
- 14 境内では目の見えない人や足の不自由な人たちがそばに寄って来たので、イエスはこれらの人々をいやされた。
- 15 他方、祭司長たちや、律法学者たちは、イエスがなさった不思議な業を見、境内で子供たちまで叫んで、「ダビデの子にホサナ」と言うのを聞いて腹を立て、

- 16 イエスに言った。「子供たちが何と言っているか、聞こえるか。」イエスは言われた。「聞こえる。あなたたちこそ、『幼子や乳飲み子の口に、あなたは賛美を歌わせた』という言葉をまだ読んだことがないのか。」
- 17 それから、イエスは彼らと別れ、都を出てベタニアに行き、そこにお泊りになった。

祈祷

天におられ、慈愛に満ち給う全能の父なる神。私たちは今、あなたの御前に呼び出され、この礼拝堂に、また、ライブ配信によって集められました。あなたに感謝と賛美と礼拝を献げるためです。

この一週間、あなたの憐れみによって、夫々の生活が守られましたことを感謝致します。あなたの導きがなければ、私たちは罪を犯し続け、その罪の中に留まっていることしか出来ない者です。そのような私たちをあなたは目に止めてくださり、その日、その時に必要な御言葉を与えてくださり、悪の中から助け出し、悪の力から解き放ってくださいましたことを覚えます。

しかし、真に私たちは頑なな者たちであります。あなたの御声を聞き、あなたの御言葉に聞き従いたいと願いつつも、何度耳を塞ぎ、あなたに背を向けたことでしょうか。主よ、どうか、私たちをお赦しください。私たちが、この礼拝において、あなたの御前に心砕かれて、本当に謙遜な者となり、あなたに仕える者へと至らせてくださいますように切にお願い致します。罪を告白し、新たな決意をもって、改めて信仰を告白することができますように。主よ、どうかあなたが私たちの内に留まってくださり、私たちの魂に語りかけ、命の力をくださると共に、私たちが歩むべき道を歩むことができるようにしてください。

平和の主よ。この世界の中には大きな悪の力があることを私たちが見据えることができるようにしてください。この世の悪の力に対して、私たちがどのようにあるべきか、どのように生きるべきかをお示しください。あなたが、すべてのところで、今も働いてくださっていることを信じて、私たちがあなたと共に働くことができるようにしてください。

主よ、この地上で、あなたの御心がなりますように、あなたのご意思が実現されますように、私たちがあなたに付き従い行くことが出来ますように導いてください。

主よ、今、この群れから離れている友に導きとお支えをお与えください。願いつつも、集うことのできない兄弟姉妹たちに御手を置いてくださり、あなたの愛が注がれますように。病にある友、様々な困難を覚えている友、悩みの内にある友、迷える友を導いてください。あなたの暖かな御手が一人ひとりの慰めとなり、導きとなりますように。今、ここに集っています私たちの心の内にも、様々な思い煩いがあります。しかし、あなたは、私たちの思いに優って、私たちの悩みを知っていてくださっています。全てをあなたに委ねることができる信仰をお与えください。

主よ、今日、あなたがこの教会に説教者を与えてくださいましたことを感謝致します。水谷勤牧師を、あなたの聖霊によって豊かに満たし、あなたの口として用いて、御国の消息をお語りください。聴く私たちにも聖霊を与え、取り次がれた御言葉が私たちの心の中で深く沁み通りますように。私たちが、その言葉を受け入れ、信じ、喜び、慰められますように。御言葉によって、あなたの教えが真実であることを味わい知ることができますように、あなたの助けを求めます。

これらの祈りを主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讚美歌55「人となりたる神のこぼし」

説教 「幼子の賛美によって」

水谷 勤

7月の第4主日を迎えました。今日こうしてとても暑い中ですが、健康を私たち支えられまして、主の教会に集い、私も皆さまと共にこうして礼拝を献げることができますことを神さまに心より感謝しています。

今日与えられました聖書箇所を通して、御言葉がまた新たに私たちの内に留まることを祈りつつ、御言葉に聞いていきたいと思えます。

以前、或る知り合いの海外の牧師が日本に来た際に、こういうことを言いました。“日本の教会は実に大変だねえ”と真剣な口調で言いました。どういう意味でそう言われたかという、日本のプロテスタント教会の現状を見て回り、その牧師は、“教会が社会に対してその声が届かないのではないか”ということを心配して、その第一印象を話した感想でした。この牧師はイギリスの牧師でありましたけれども、自分の国では昔ほどではないにしても、教会が、まだある程度社会的に認知されていて、教会のメッセージというもの社会が聞くという状況があるけれども、日本ではなかなか発言を発信しても、果たして届いているのだろうかと思ふほど、教会が社会全体の中で実に小さな存在であるということ、その難しさを肌で感じ取っているようでありました。

確かに日本の教会は全体の1%以下ですから、その通りであるわけですが、考えてみますと、聖書の世界も当時そうであったと思うのです。地中海世界の片隅で、主イエスに従った人々その群れは、ほんの一握りよりも少ない、きっと砂粒くらいの存在だったと思えます。そして『マタイによる福音書』が書かれた当時もそうでありました。今日はこの福音書が書かれた当時の教会について考えてみたいのですが、少しその背景的なことを踏まえて見ていきたいと思えます。

『マタイによる福音書』は、私たちに、主が言われたこと、“わたしはいつも、あなた方とともにいる” “主イエスはインマヌエル”と呼ばれ、“神はわれらと共におられる”(マタ1:23)との約束を伝えています。“神は私たちの味方である”、当時の人々は、その御言葉により大きな励ましを与えられていたと思えます。また、福音書の書かれた当時の人々はどのような状況で、その御言葉を聞き、慰められ、励まされていたのでしょうか。この福音書が書かれていた当時、すでに教会がありました。この福音書の中にも教会と言う言葉が出てきて(16:18. 18:17)、例えば“教会に申し出なさい”という言葉があるように、既に形を確立したものと教会があったということが分かります。ですから、この福音書は当時の教会共同体に宛てられた書かれたものであるということが分かります。“二人、三人がわたしの名によって集まる所には、わたしもその中にいるのである(18:20)”という主イエスの言葉も思い出されます。きっと当時の教会は、その言葉を大切にしていたと思えます。

マタイの教会の共同体は、時代の大きな変化の中に置かれていました。ローマがついにエルサレム神殿を滅ぼし、ユダヤ人たちは戦争の敗者としてのローマ帝国支配下の生活が始まりました。特にローマによって神殿が破壊された後に主イエスが語られた、“わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない(9:13)”という言葉、旧約の預言者の御言葉(ホセ6:6)ですが、その言葉が、人々の信仰の基軸になりました。“神の憐れみを世において実現するのだ”ということ、そこに立ち返ることとなりました。また、『山上の説教』

では、“平和を実現する人々は幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる(5:9)”とあるように、平和を作り出す者こそ幸いであり、神の子たちなのだ、主の御心を知り知り、“主に近い自分たちののだ”ということ、その置かれている状況の中で深く心に留めたと思います。“だれかが右の頬を打つなら、左の頬も向けなさい(5:39)”とあることから分かるように、抑圧された者の生活の現実には厳しく、非戦による抵抗も人々の生活の一部であったと言えます。迫害され、社会の中で小さくされ、もはやその存在が掻き消されそうになっている時に、マタイの教会は、主イエスの御言葉に希望を求め、そして、そこに確信を持っていたと思われまふ。そして更に今日の箇所、彼らが励まされていたのは、今日の個所の後半に出てくる子どもたちの存在でありました。“ダビデの子にホサナ”という賛美を献げる子供たち、そのように主イエスを賛美している姿、そこに人々が共鳴するものがあつたのだと思えます。

日本の教会の多くで、毎週、教会学校が行われています。今日も主日の朝早くから子どもたちが教会に来て、丁度夏休みが始まった頃だと思えますけれども、そのように子どもたちの礼拝に出席していると、一緒に礼拝をしていると、子供たちがすぐ隣で一生懸命讚美歌を歌っているその姿に、また、その声にふと慰めを与えられることがあると思えます。そのような時というのは、大人の私たちが平日の一週間の中で、もしかすると世の戦いに私たちが疲れているような時に、特にそのように感じられるのかもしれない。そのようなことを考えながら読むと、今、マタイ福音書の着眼点は、この全ての世代を含めた教会共同体、そういう視点があるのではないかと思います。そして、お互い違う世代が互いに力づけられるということに加えて、更に、洞察が加えられています。それは主の真理そのものが、いと小さき存在を通して、世に対して光を発するように表わされる、御業によってそういうことが起きるということを今日の箇所が示しているのではないのでしょうか。主の真理そのものが、いと小さき存在を通して、世に対して光を放つように、御業によって顕わされるということ、今日またそのことを受け留めていきたいと思えます。

今日は、旧約聖書の箇所としまして『エレミヤ書』が与えられています。この箇所は日本基督教団の聖書日課の今日の箇所でもありますけれども、すでに私たちの置かれている今日の現実に必要な御言葉が与えられていると思えます。エレミヤが預言者として召された時代も、時代の転換期でありました。アッシリア帝国が衰退し、新バビロニア帝国が徐々に勢力を伸ばしてくる時代、そしてそれと連動するように、ユダヤ教内では、どういう動きがあつたかと言いますと、例えば、“エルサレム神殿は決して滅ぶことがないのだ”と、また、“ダビデ王朝も必ず永続するのだ”という思想が強くなり、それは人々の士気を発揚するには都合の良い主張でありました。ユダヤ教の人々にとって、謂わば、それは人々によって正当化されたある種の神学でもありました。そのような時代の中でエレミヤは、今日の7:4、「主の神殿、主の神殿、主の神殿という、むなしい言葉に依り頼んではならない。」と「万軍の主」が言われると御言葉を取り次ぎました。「神殿」そのものが絶対的なものになり、偶像になっている。当時のユダヤ人にとっては誇りとしていた、自分たちのアイデンティティーそのものであつたその「神殿」、何かそれ自体が究極の救いをもたらしてくれるかのように人々が陶醉をし始める、その「神殿」が偶像になっている時代、それが、「むなしい言葉」だと言うのです。人々が「神殿」というそれ自体には力がないものを繰り返し虚しく唱えてい

るということ、それに虜になっているということが繰り返し空しい言葉を発しているということから分かります。自分の心ではもう考えることができなくなっている様子、逆に不自由な状況になっているという、そういう社会の状況が表されています。そういうことが時代の転換期に起こりやすいのだということを、エレミヤを通して主は言われているのではないのでしょうか。そしてさらに弊害が起こっていることが分かります。続く 7:5-6 を見ますと、「この所で、お前たちの道と行いを正し、お互いの間に正義を行い、寄留の外国人、孤児、寡婦を虐げず、無実の人の血を流さず、異教の神々に従うことなく、自ら災いを招いてはならない」とあります。「寄留の外国人、孤児、寡婦を虐げず、無実の人の血を流してはならない」、それが「正義」ではないか、と。そしてそのことがこの神殿中心主義を掲げて神殿を連呼して熱狂する人々に対する答えとして、エレミヤを通して語られている内容であると言えます。

そのような観点から見ますと、今日の福音書の箇所は、いわゆる“宮清め”と言われる個所ですけれども、そこに見えてくるものがあると思います。神殿で両替人や鳩を売る者を、そしてそれを許可していたユダヤ当局の不義を厳しく正される主イエスの姿です。歴史的にここで何が実際に起こったのかということを考えて、まあ“こういうことであった”と言われています。それは神殿で動物の犠牲を献げるためには、どうしても現地でそれを購入する必要があり、また、庶民は鳩などの安く買うことのできる動物をそこで買う必要がありました。それを献げるために必要でした。主イエスの時代のエルサレム神殿には、「異邦人はここまでしか入れません」、「ここで礼拝しなさい」という『異邦人の庭』と呼ばれる比較的広い区画が神殿境内の南側にあり、その場所で当時、動物の売り買いや両替が為されていたということ。ですから、もはや異邦人たちが礼拝する場所がそれによって占拠されているという状況でありました。そこで主イエスは“わたしの家は、すべてのための祈りの家と呼ばれるべきである”と言われて、つまり、“何か特権階級があるわけではなく、見下される人々もあってはならず、全ての者が神に造られた者として神の下に等しく招かれ、神を崇めることができる、それが本来の神の家ではないか”と言われました。神の御心と熱情をそのままに伝えられた主イエスではなかったかと思えます。

マタイ福音書がこの場面を描いているわけですが、この描いていることには特徴があります。情景として、一方で両替人や鳩を売る者たちがいて、そして、それを許していた当局の不正、不義を主イエスが正している。もう一方で、真理と真を気づかせようとしている主イエスについて、子どもたちが大いに賛美を献げている、そういう場面です。先ほども触れましたけれども、マタイの視点は、このいと小さき存在を神さまの視点で更に大きく、そこに焦点を合わせていると言えます。そして驚かされるのは、いと小さき存在の賛美が「ダビデの子にホサナ」という主イエスを称えるその賛美が、敵対する祭司長や律法学者たちを結果的に噤ませるのであります。

或る話を思い出しました。教会でよく取り上げられたり、触れられる本でありますけれども『嵐の中の教会』、ヒトラーと戦った教会の物語の本の或る場面です。こういう出来事が記されています。リンデンコップという小さな村の教会が、ナチスと対峙して、そして、会堂の奪い合いになった、そういう史実があったという場面、そして村中の人たちは教会に集い、牧師を守るようにして、その会堂が村人で一杯になった。そして、一同が共に賛美を歌い、ナチスのドイツ的キリスト者と呼ばれる実行講師

に抵抗する場面が思い出されます。オルガンに導かれて、会衆が一つとなって、『神はわがやぐら』の讚美歌を歌い始める。強制や圧迫に屈服せずに、福音が体の隅々まで生きて働き、皆が、自分は主の教会のものだという自覚において一つになった、そういう賛美であったという場面、その出来事、それは時代状況の中で、世に対して信仰を告白するように響き渡る、そういう教会の姿であり、そして、主が為して下さったことの証、そのことが印象深く描かれている、そういう場面です。子供たちが「ダビデの子にホサナ」と賛美をした、きっとマタイの教会の人々は、そのように主イエスを賛美する幼子たちに、自らを重ね合わせたのではないのでしょうか。自分たちは、全体の中では実に小さな存在である、何か声を発しても届かないかもしれない。しかし、それ故に神により頼み、真理を保ち行く私たち、そして、神を賛美することで平和を貫き、信仰を表明して行くマタイ共同体。けっして強い者としてではないかもしれない、全体から見れば非常に小さな存在で、注目されることもないかもしれない。しかし、或る時に、神が大きく用いられるのだということを今日、私たちは心に留めることができるのではないのでしょうか。そしてまた主日ごとに、私たちは主を礼拝し、主の聖名を崇め、そのようにしてこの世に対して、主を表して行く者ではないのでしょうか。詩編 8:3 に、「幼子や乳飲み子の口へ、あなたは賛美を歌わせた」とあります。“幼子のようなものに真理を神さまは授けられ、賛美とその信仰を授けた”と言われている通りであります。その約束が、まさに今、この状況だと、世にあつて立つ教会に主は語られ、世にあつて立つ教会に、“神はわれらと共におられる”、マタイ福音書の御言葉が語り掛けています。

お祈りをお献げ致します。

主なる御神さま、共に御言葉を今日与えられましたことを心より感謝致します。主が、今日も世に立つ教会を強めてくださいますことをありがとうございます。私たちに賛美を授け、主の真と正義を開き示してください。私たちの生きる社会において、また世界において、互いの間に正義が行われ、弱い立場の者が深く顧みられ、無実の人の血が決して流されることがありませんように、心を合わせ切に祈ります。主の平和がなりますように。主の御業により、小さな存在を世にあつて大きく用いてください。主イエスが救い主であることを見出した子どもたちのように、私たちが賛美と主への信仰を世に表して行くことができますように。とりわけ、ご自身を献げられた主イエスの歩みが、常に私たちの信仰の歩みでありますように導いてください。

全ての教会を感謝致します。信濃町教会を感謝致します。連なるお一人おひとりの信仰と、この季節のご健康がどうか守られますように。教会を牧される佃先生、大谷先生のお働きとご健康が御手に支えられますように。子供たち、また大人たちの主の体なる教会に、主の豊かな励ましと深い慰め、主の喜びの御恵がありますように共に心合わせお祈り致します。

これらの祈りを、尊き我らの救い主イエス・キリストの聖名によってお献げ致します。アーメン。

讚美歌:412「昔 主イエスの」

献金・感謝(田斐修一?)・主の祈り(讚美歌 21 93-5A)

今日も朝から厳しい暑さの中、この会堂に集い、あなたの御前でお祈りを献げられることができましたこと、真に感謝申し上げます。また、今日から始まるこの一週間、ここに集まりし者の他、今日事情があり、この会

堂に集うことが出来ません兄弟姉妹、またこの教会に連なる肢々に対して、あなたの恩寵がこの一週間与えられますことをお祈り申し上げます。ここに献金の祈りを献げます。父なる神さま、主にある兄弟姉妹と共に礼拝を献げることが赦されましたことを感謝致します。説教を通して豊かに御言葉を与えてくださり感謝致します。私たちがこの一週間を夫々の旅路の中で、御言葉を糧として歩むことができますように導きください。私たちは必要な物を与えられ、主の僕として生きることが赦されていることを感謝致します。今、夫々が与えられた者の中から、感謝と献身の徴を御前に献げます。どうぞ祝して、教会のご用のために用いてください。主が教えてくださった「主の祈り」を共に祈り、新しい日々を迎えさせてください。「主の祈り」…アーメン。

派遣：讃美歌 88「心に愛を」

祝福：主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の親しい交わりが、あなたがた一同と共に、また私たちが心に留める一人ひとりの上に、限りなく豊かにありますように。アーメン。

報告：(1)説教者紹介。(2)次週平和聖日催事案内。(3)相互牧会の要請。(4)週報記載漏れ、管理委員会開催案内。

後奏：「ティエント第1旋法」(F. コレア・デ・アラウホ)